（別紙３）

公表　事業所における自己評価総括表

○事業所名	こぱんはうすさくら高坂駅前教室			
○保護者評価実施期間	令和７年　１２月　１日		～	令和8年　1月　２０日
○保護者評価有効回答数	（対象者数）	47	（回答者数）	37
○従業者評価実施期間	令和８年　1月　１０日		～	1月31日令和8年
○従業者評価有効回答数	（対象者数）	15	（回答者数）	12
○事業者向け自己評価表作成日	令和８年　2月　１５日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	「音楽療法」を支援の核に据え、5領域を網羅した包括的なプログラムを提供している。成功体験の積み重ねを重視し、児童一人ひとりの自己肯定感を育む支援が強み。	心理士等の専門職が各児童の発達段階を精緻に分析・評価し、その結果を全職員で共有している。 また多角的な視点から課題を抽出し、カンファレンスを通じて最適な支援方針を模索している。	個々の課題解決を加速させるため、ご家庭との緊密な情報共有に加え、関係機関との連携をさらに強化し地域全体で児童を支える体制を構築していく。
2	児童への直接支援に留まらず、保護者の精神的な孤立を防ぐレスパイト（休息）や心理的ケアを重視している。 電話相談や面談を通じ、不安に寄り添う伴走型の支援を行っている。	受動的な対応ではなく、日々の送迎時などの対話から細かなサインを察知するよう努めている。いつでも相談しやすい心理的安全性に配慮した環境づくりを行い、早期の課題解決に繋げている。	保護者同士の横のつながりを促進する「こぱんサロン」を定期開催し、悩み事の共有や情報交換の促進を図る。 また同時に保護者様に対してのペアレント・トレーニング等の機会を創出できるよう努めていく。
3	現状の課題解決だけでなく、将来の「身辺自立」や「社会生活」を見据えた中長期的な視点での支援を心掛けており、ソーシャルスキルトレーニング(SST)の強化を図っている。	専門職によるアセスメント結果に基づき、スモールステップでの目標設定を行っている。 職員間で支援の進捗を常に共有し、段階的にステップアップできるよう一貫性のある支援を提供している。	多様なニーズに対してより多角的なアプローチ（見立て）を可能にするため、さらなる専門職の増員とチーム体制の拡充を目指し、支援の質を底上げを行っていく。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	利用児童数の増加に伴い、集団支援時のスペースの確保や、個別指導・クールダウンのための静穏な環境設定に制約が生じている点	施設の物理的な広さに限りがあることが主因ですが、既存のスペースを最大限に有効活用するための動線設計やレイアウトの最適化が、まだ十分ではないと認識している。	室内レイアウトを抜本的に見直し、間仕切り等の活用で多目的な空間を創出する。 また、屋外活動を積極的に取り入れ、社会マナーや交通ルールの習得を目指した野外活動を拡充することで、活動の場を地域へと広げていく。
2	家族支援において、ペアレント・トレーニング（ペアトレ）の実施や、利用児童のきょうだいを対象としたイベント等の多角的なアプローチが不足している	これまで児童本人への直接支援や専門性の向上を最優先してきた結果、家族全体の支援に関する体系的な知見の蓄積や、研修体制の構築が後手に回っていたことが要因と考える。	外部研修への参加や事業所内での勉強会を通じ、職員の家族支援スキルの底上げを図る事で、自信を持って専門的なアドバイスを提供できる体制を整え、定期的な家族向けプログラムの実施へと繋げていく。
3	他の福祉施設や地域の子供たちとの交流機会が限定的であり、社会経験を積むための場づくりが十分ではない	守秘義務やプライバシー保護の観点から、交流の実施に向けた調整コスト（合意形成や体制づくり）が高く、慎重な対応が求められることが要因としてある。	近隣施設との連携を強化し、相互のプライバシーに配慮した上での共同イベント（季節行事等）を企画します。 地域行事への参画を通じ、児童が社会との繋がりを実感できる機会を段階的に創出していく。